

■山田(業広)椿庭 臨床家で考証家。徳川時代随一の医学者で、維新後の漢方存続に寄与も、人名辞典類に載らず忘れられた。

やまだちんてい

フエトン号事件 1808＝ 高崎藩主侍医山田由之の長男に生まれる。諱は業広，字は士勤，通称は昌。

杉田玄白没・1817＝ 9歳： 水野忠成老中1818＝10歳： 群書類従完結1819＝11歳： この年，内藤希哲の「傷寒雑病論類編」が，その死後84年にして，ようやく刊行されている。

シボ*朴鳴滝塾 1824＝16歳： 父が病気になるため，代わって，高崎藩主に仕え，食禄を受けるが，家族7人を養ってゆくに足りないの
で，余暇に，筆耕や手芸をして刻苦銀難，家計を支えたという。
・・・ 1826＝18歳： 考証学派の儒者朝川善庵に就いて儒学を修め，伊沢蘭軒に漢方医学を学んで，俊秀“五哲”の一人となり，
五哲の一人森枳園によれば，椿庭は，篤実謹厚，沈黙寡言，論争せず，暴言を吐かれても莞爾，奇説を好ま
ず，正大明確をもって旨としたという。
シボ*朴迫放・ 1829＝21歳： 蘭軒が死去して後は多紀元堅につく。また痘科の秘訣を池田京水に受ける。

この間，高崎藩大沼氏の娘を娶り，3男4女をもうける。長男は早世し，家業は次男が継ぐことになる。

滑稽+人情本 1835＝27歳：

大塩平八郎乱 1837＝29歳： 江戸本郷春木町に開業。

勸進帳初演・ 1840＝32歳： おそらく地名を合字して，椿町と号する。和田東郭の「蕉窓方意解」に匹敵する名著になる，*小冊子ながら
，オリジナルに富む「経方辨」を草稿，

順天堂始・・・ 1843＝35歳： 「段長補短記」を草稿。
天保改革終・ 1844＝36歳：
阿部正弘首座1845＝37歳：
孝明天皇・・・ 1846＝38歳： 火災にあい，本郷弓町に移転する。
・・・ 1847＝39歳： 「傷寒論釈詞」を草稿。序文に椿亭主人と号する。

北斎没・・・ 1849＝41歳： 内藤希哲の「傷寒雑病論類編」と共に漢方医学史上に残る名著で，4年の月日を費して完成した*畢生の書「金
匱要略札記」(33巻)を草稿し，序文に椿庭と号する。

国定忠治歿・ 1850＝42歳： 次男業精が誕生。

ペリー来航・ 1853＝45歳：

蕃書調所・・・ 1857＝49歳： 幕命により医学館の講師となり，

桜田門外変・ 1860＝52歳：

生麦事件・・・ 1862＝54歳： 正月に，將軍家定に拝謁するが，

薩摩藩士密航1865＝57歳： 原南陽の「医事小言」を補正，小冊子ながら，示唆に富み教えられるところが多い「医事小言補正」を草稿。高崎藩に願い出てその職を辞し，

明治維新・・・ 1868＝60歳： 高崎に転居。藩主の命で，一等侍医兼政務参謀周旋局総裁となり，政務を司る。
戊辰戦争終・ 1869＝61歳： 藩主の命で，業精が，大学東校東京人学の前身に学ぶ。高崎藩の医学学校督学となり，
1870＝62歳： 藩政改革で，医学大教授に任ぜられるが，
廃藩置県・・・ 1871＝63歳： 廃藩置県で解職，業精も大学東校を中退し，高崎の椿庭のもとに帰って，診療に従事。
学問のすすめ1872＝64歳： それまで草稿した自らの書中，難解あるいは問題ある箇所を考証解釈した「九折堂読書記」を草稿。
明治6年政変 1873＝65歳：
佐賀の乱・・・ 1874＝66歳： 家族と共に上京し，本郷に転居。

門人井出正安が筆録した「椿庭先生夜話」も，小冊子ながら，密度の濃い珠玉の文で構成されている。

大久保暗殺・ 1878＝70歳： 門人たちと，神田五軒町に済衆病院を開き，院長に推されると，
琉球処分・・・ 1879＝71歳： *新政府の西洋医学一本化政策に抗すべく，漢方医の嚆矢となる演説会を開いて，{温知社}とし，月刊誌{温
知医談}を創刊。創刊号の巻頭に，漢方医学修業の心構えと座右の書をあげ，漢方医学を学ぶ者の必読の論
文とも言える「医学心得方大略」を論述。存命中に唯一出版された定本「経方辨」を刊行。

・・・ 1880＝72歳： 皇太子明宮(大正天皇)を拝診し，一カ月余，投薬などするも，
明治14年政変1881＝73歳： 中風を發し，喘息やまず，あらゆる治療も効験無く，没した。
「金匱要略札記」等を発見，その影印出版に至った真柳誠によれば，とりわけ幕末から明治初期にかけて活躍
した考証学派医家達の著作は，ごく一部しか当時上梓されず，彼らの膨大な量におよぶ稿本や写本の多くは
近年までその内容はおろか，存在すらほとんど知られていなかったが，向ヶ丘の蓮光寺の墓碣は，破格の大
きさで，門人達の厚い信望が窺い知れるという。本年譜は，「椿庭山田先生墓碣」によっているが，真柳誠に
よれば，「(子の)業精先生之伝」に記述されているものでは，家系についての説明が相当異なり，伊沢蘭軒に
師事する以前の様子が詳しく，古書蒐集を好み，古注を最も尊んでいるものの，西洋医学に対し，ある面で
漢方と同等の価値を認めていたことなどは，業精の口述又は自筆した資料を基にしていることは疑いなく，
信憑性も高いと思われる。

寺師睦宗「内藤希哲・永富独嘯庵・山田椿庭～その人となりと業績～」。真柳誠「幕末考証学派の巨峰・椿庭山田業広」で追補，